



TITLE:

[書評] 高木重俊著「初唐文學論」

AUTHOR(S):

道坂, 昭廣

CITATION:

道坂, 昭廣. [書評] 高木重俊著「初唐文學論」. 中國文學報 2006, 71: 105-115

ISSUE DATE:

2006-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177971>

RIGHT:

書 評

高木 重俊著

『初唐文學論』

道 坂 昭 廣

京都大學

中國文學史における頂點のひとつが盛唐であることは、論を待たない。しかし、王朝の成立から盛唐の開幕まで、約百年を要したことは、人間の内と外、即ち精神と制度の間の「ずれ」を示しているように思われる。少なくとも、文學の源である個人の感情とその表現が、王朝の交替という社會の變化に對應するにはそれだけの時間を必要としたのだ。この百年を中國文學史では初唐と稱する。

本書は、この時期の社會の變化に對應しようとする人間
の精神、或いはそれによって生じた新しい意識を、文學作

品を通して跡付けようとしている。以下に見るように本書は「生涯と文學」と題される論考が多い。また、そのような題名でない論考、例えば第六章の張説論も、各節が生涯のある時期や共通した状況におかれた張説の心情の解明を目的とし、全體で張説の生涯と文學が明らかにするように構成されている。本書の軸のひとつが初唐の文學者の生涯の考究にあることは間違いない。そして文學者を順に排列することにより、文學者と文學を取り巻く状況とその移り変わりを捉えることもできるようになっている。もちろん本書は、單に文學者の傳記の羅列によって、初唐という時期を描こうとするものではない。著者は「序章」で、各論文の目的や概要を的確に整理しておられる。ここでは、評者なりに各論について、簡単にまとめておきたい。

序章 初唐という時代と、本書の概要

初唐文學の擔い手である新興知識人が、どのようにして登場してきたか、さらに彼らを取り巻く状況が紹介される。彼らは、唐王朝が成立し貢試

制度が機能しはじめたことにより、名利と榮達を求め、個人の力量で人生を切り開こうとした人々であつた。舊勢力である門閥貴族との軋轢や、政權の混亂のなかで、彼らのほとんどは不遇な生涯を送つた。しかしそれゆえにこそ、彼らがどのように生きたのか、どのような思いを文學に込めたかという考察が必要と、本書が解明しようとする問題が提議される。そのうえで「彼らは何を目的として文學活動を展開したのかという考察を中心として、彼らの境遇と文學上の成果とを結合させて論じようとするものである」(五頁)と本書の方法が述べられる。

第一章 王 績 論

第一節 王績傳論——呂才「王無功文集序」をめぐって

より正確な王績像を描くことを意圖し、従來用いられていた陸淳削節の三卷本ではなく、韓理洲

氏によつて會校された『王無功文集五卷本會校』をテキストとして採用し、呂才の序文や、新發見の作品も含む王績の文學を考察し、齟齬多き人生の中で、出仕の夢破れ隱者としてのイメージされることを意圖せざるを得なくなった、王績の孤獨な姿を抽出している。

第二節 王績の文學——寒郷の春

王績の晩年を、彼の文學作品を通して描寫する。都市と郷里という活動の場や、「顯」と「隱」という感情の揺れを示す彼の文學が、晩年に郷里で隱者として暮らすことによつて特色を示すことになった述べる。これは一般に理解される王績像であるが、實は彼自身が自覺的に隱者としての自畫像を都市に届けようとしたのであつたと喝破されている。王績の文學に感じられる寂寥が都への未練と不遇から生じたとし、「三月三日賦」「元正賦」という詩的表現をもつ賦が彼の心情を反映した作品として、特に検討が加えられる。さらにこ

これらの賦が後の王勃・盧照隣・駱賓王等の文學と共に通する要素をもつことから、彼を、初唐文學者たちの精神的系譜の最初に位置付ける。

第二章 初唐 四傑論

第一節 盧照隣の生涯と文學

第二節 駱賓王の生涯と文學

第三節 王勃の生涯と文學

第四節 楊炯の生涯と文學

第一節から第四節は初唐の四傑と呼ばれる各人の人生を追跡する。そのうえで彼らの文學がその生涯とどのように結びついていたかを、相互の關係にも配慮しながら考察する。

盧照隣は、蜀に滞在中、その地に勤務する官僚と交流したが、盧照隣の文學には彼らに對する共感が反映されている（第一節）。駱賓王が挫折と失意のなかでも、社會的地位の獲得と、何よりも文學活動を諦めようとしなかったのは、同じ境遇の

人々との精神的な強い結びつきを求め信賴してのことであつた（第二節）。王府を追われた王勃は、蜀の官僚たちの支持、そして何よりも盧照隣との交流によつて文學を確立させた（第三節）。四傑のうち最も地味な楊炯だが、彼のいわゆる碑傳文學の幾つかには同じ階層への同情が見られる（第四節）。このように四人の文學と人生が總括されている。

第五節 王勃「春思賦」と盧・駱の七言長篇詩

初唐時期に多く作られた七言長篇、いわゆる歌行體について論じている。貴族サロンで作られた律詩に對し、七言長篇詩は邊境（周邊）で官僚として過ごさざるを得ない新興知識人たちの壓倒的支持をうけて勃興してきた詩體であつた。王績の「三月三日賦」、王勃の「春思賦」が、表現・モチーフともに盧照隣「長安古意」、駱賓王「帝京篇」と似ている點に注目し、影響關係を考察している。

第三章 陳子昂論

第一節 官人としての陳子昂——その上書を中心として

唐の文學、特に詩の革新という側面にのみ注意されがちな陳子昂であるが、ここでは官僚として、武則天に對して行つた上書に注目する。陳子昂は約十五年の間に十六編もの熱意を込めた上書を行つた。これらの散文を手掛かりに、彼の官僚としての理念について述べる。

第二節 陳子昂の文學——兼濟と獨善の間で

第一節は公人としての陳子昂を論じたが、第二節はその態度を支えた彼の理念を、代表作とされる「感遇詩三十八首」を中心に考察する。「兼濟」と「獨善」をキーワードに、陳子昂という人物に切り込んでゐる。出ては「兼濟」、退いては「獨善」という理念は、陳子昂だけではなく、新興知識人に共通するものであり、また唐王朝の公認（公式）の文學觀でもあつたことを『隋書』文學傳序を證據として論じる。

第四章 沈佺期・宋之問論

第一節 沈佺期の生涯と文學

宮廷詩人としてイメージされる沈佺期であるが、權力争いに巻き込まれ投獄、左遷の経験をもつ。そのような状況で作られた詩には、宮廷の作とは異なる、人間としての眞實の聲があると筆者は指摘する。ただ、結局は彼は宮廷詩人としてありつづけ、文學の新生面を開くには至らなかつたと結論付ける。

第二節 宋之問の生涯と文學

初唐最大のオポチュニストとされる詩人の傳記。ただ彼はこの時代の人々からは、魅力に富む詩を量産する詩人ともみなされた。本書の他の詩人たちが現實と格闘するなかで文學を成長させたのに對し、ひたすら權力にすりよつた宋之問にとつて、文學は上昇のための手段であつたと指摘する。

第五章 初唐詩人を巡る人々

第一節 薛元超——寒俊を汲引した實力者

第二節 裴行儉——文藝と器識の問題を中心に

薛元超・裴行儉の二人は、寒俊（新興知識人）を積極的に引き立てたとされる。この章では、特に四傑との関係を中心において、その實態について考察している。楊炯は「王勃集序」で「薛令公は朝右の文宗」、「盧照隣は人間の才傑」と盧照隣と對にし、さらに「末契に託して一變を推し」と、薛元超を文學の改革を支持したと高く評價している。第一節は、この言葉の意味について考察している。第二節は、裴行儉の四傑に對する有名な論評について、逸話の眞否より、人物推薦のあり方・理念がこの逸話には表明されていたのだと結論付けている。

文學者とは呼べないが、彼らの存在は初唐文學を特色づける重要な要素のひとつであつたということが本章から明らかになる。

第六章 張說文學論

第一節 宮廷詩人としての張說

第二節 欽州流謫詩群について

第三節 先天中、洛下唱酬詩を巡って——初唐新興文人官僚の一側面

第四節 岳州小詩壇と幻の『岳陽集』

第五節 張說の抒情——官途の旅情

張說について、著者は「唐代新興士人の最初にして最大の成功者」（二二二頁）と述べる。第一節は約三十年にわたる宮廷詩人としての張說の文學活動を分析し、宮廷文壇の有様を紹介する。

第二節と第四節は左遷時期の彼の文學活動を論じる。これまでこのような状態におかれた文學者は、悲哀を述べるだけ、言い換えれば個人の悲しみを述べるだけであつた。しかし張說の左遷地での文學は、人間について考えをより深め表現するものになつていったことを指摘する。

第四節は、左遷された地で小文壇が形成された

ことが特筆される。本書でも紹介されているように、盧照隣と王勃がともに蜀にあった時期、彼らは同じ場で文學活動を行ったこともあった。そこでは彼等だけではなく、蜀の官僚もともに文學活動を行ったと思われる。しかし、王・盧以外の人物の作品のほとんどが時間の淘汰に耐えるものではなかった。ここに至って、張説をリーダーに参加者が互いに影響を與えあうことにより、中央（宮廷）だけでなく、地方でも独自の價值をもつ詩文集が作成されることになったという事實が論證される。

第五節は張説の浮沈を繰り返した官僚としての生涯を旅ととらえ、その中で生起した様々な感情が文學に反映されていたことを論證し、その内味を分析する。そしてそのような作品が多くの人々の共感を得、また盛唐文學を開くことになったと述べる。第一節が初唐文學の流れの最後に位置する張説であり、第五節は盛唐文學の最初に位置す

る張説を論じているのである。

第二・第三・第四節は、王績以來引き繼がれてきた新興知識人たちの精神の系譜が張説において如何に結實したかも述べられる。その結論は、左遷（不遇）の嘆きが止揚されたということと、左遷の地における知識人の連帶の強化という二點に歸納できよう。特に第三節は王績・陳子昂に典型的にみられた「獨善」の初唐における完成型として讀むことできる。

初唐文學論關連年表

初出一覽

あとがき

索引

中文摘要

* * *

以上のように、各章は傳記研究を中心としているが、本書を通讀すれば、初唐という時代の雰圍氣が浮かびあがつ

てくる。それは著者が初唐という時期の文學狀況について、明確な視野をもっておられるからであろう。著者は「序章」で、「文章の四友」や蘇頌・張九齡といった文學者に言及できなかったということを謙虚に述べておられる（二四頁）。しかし、それはまさに望蜀の歎と言うべきものであり、本書で取り上げられた人物たちこそ、いろいろな意味で典型的な人物であり、初唐という時代を象徴する人物であったのである。典型的というのは、考察の対象とされる人物は文學者としてもちろん傑出してはいたけれども、當時決して特異な人間ではなかったことが、著者によって明らかにされているからである。これらの文學者の背後には多くの新興知識人が存在し、彼らを支えていたのである。いわば表現を持つことができなかった多くの彼らが存在し、彼らの表現に共鳴していたのである。著者もその存在に充分に注意し、「楊炯は新興知識人層に共通する思いを支えとして生きたのである」（二四三頁）「王勃は自己の流寓の思いを賦作品に表わしたのであるが、彼の周囲には、それを自身の文藝として、深い共感を込めて受容する人々の存

在があったのである」（二五四頁）「春思賦」は、……新興知識人層を背景として成立した文藝と言つてよいだろう」（二五五頁）。「陳子昂がしばしば口にする兼濟と獨善に關する語彙を手懸りに、彼が新興官僚として、その精神を掲げて行動した軌跡を追尾し、あわせて、その精神が、門地を持たない當時の士大夫文人層の依據すべき理念となつていたのである……」（二三九頁）などと、各所で言及しておられる。このような指摘から、著者の初唐の文學狀況に對する深い洞察を感じることができるのである。

このような著者の視點を踏まえると、本書の内容は次のように概括できるかもしれない。

著者は初唐文學を推進したのは新興知識人といわれる階層の人々であるのとらえ、この階層に屬する人々がどのように世に登場し、地歩を獲得していったかを、文學活動から解明しようとする。最初期に位置する王績は、極少數の理解者しか見いだせず、隱者たらざるを得なかった。四傑が不遇にありながらも、その思いを詩歌文學に託して表現し得たのは、その思いを理解共感してくれる讀者の存在を

意識出來たからであつた。彼らのよき讀者であつた新興知識人は、儒教的理念に基づき、經國濟民の思いと、それが果たされぬときには野に在つて獨善に居ることを、意識としてはもつていた。その理念を明確に表明したのが陳子昂である。一方、沈佺期和宋之問は、この時期の時流の文學にのみ忠實であらうとした。彼らはそれぞれに、この時期の新興知識人の生き方のひとつを示しているのである。そしてこの時期の新興知識人の完成した型が張説ということになる。また、彼らが世に出て行くためには中央の高級官僚の推挽を必要とした。薛元超・裴行儉という舊勢力である貴族階級に屬する二人の視線と知識人層からの二人への視線は、この時期の二つの階層の關係を具體的に示すものであつた。

まさに周到な配慮のもとに構成された、初唐という時期とその文學についての充實した論集と言えよう。

* * *

このように、初唐とその時期の文學について、本書から

入念なレクチャーを受けた結果、我々の頭の中に、この時期について幾つかの強い印象が出來上がっていることに氣付く。その一つは、初唐という時期は、様々な對立が顯現化した時代であつたということである。「都市と郷里」「中央(宮廷・サロン)と地方」「律詩と七言長篇」といった對立の構圖が、著者によつて指摘されている。そして、これらの對立の底にあるのが、貴族と新興知識人の對立である。「初唐詩人を巡る人々」の章で、裴行儉と四傑の關わりが考察されている。當時高く評價されていた四傑がなぜそれに相應しい官位を得ることができなかったのか。裴行儉が彼らの將來を見通したとされる有名な逸話を切り口に、當時の文學觀・道德觀まで掘り下げて説明しておられる。ここからは貴族と新興知識人の對立が、實は價值觀の對立であつたことが明らかになる。

そして、本書から得た初唐という時期に對するもう一つの印象は、この時期の記録は、結局、貴族の側にあつて新興知識人の側はなかつたということである。先の印象と重ねると、初唐は、價值觀もまた貴族の側にあつて、新興知

識人の側にはなかったということである。裴行儉と四傑をめぐる逸話や楊炯・宋之問の逸話について、それが成長していった過程を、著者は詳細に考察しておられる。それを讀むと、彼らに對する惡評の累加は、貴族階級の新興知識人階層に對する反感が感じられる。一方で、新興知識人層の側が、不遇に抗議するのではなく、吐息のように洩らす、才能がありながら官位がそれに對應していないという「懷才不遇」という嘆きも、價値の基準が貴族の側にあつたということを実に示すものであらう。

このように考えると、逸話の取り扱いについて、初唐という時期は他の時期以上に慎重でなければならぬと思われる。著者はそれぞれの傳記研究において、多くの逸話を利用なさっており、また、その眞偽については極めて慎重な態度を持しておられる。しかし、それが特に評價を含んでいる場合、どちらの視點と價値觀によるものなのかについても慎重に辨別する必要があるのではないだろうか。例えば、陳子昂の上書が喧傳されたという記録を取り上げておられるが、具體的にはどのような人が評判としたのだらう。

う。少なくとも貴族階層の間ではないだらう。陳子昂と同じように、上書等と通じて世に出ようとする人々が、模範文として評價したと考えるべきではないだらうか。駱賓王の「帝京篇」が絶唱と評されたことも、七言歌行の當時の位置付けについての著者の論から見て、價値の二元化の中では、兩方に高く評價されたとは考えにくい。初唐の文學者とその作品は、新興知識人の間の價値觀では認められながら、貴族階層の價値では評價されないという對立を常に含んでいるのである。但し、新興知識人の價値觀の表明は、徐々に爲されるようになってくるのであるから、單純に二極の對立と割り切ることができないのはもちろんのことである。しかし、多くの對立の指摘のなかに、このような「評價の場」における對立ももう少し明確に指摘していただけたらと評者は感じた。

ところで、このような對立する價値軸が存在していたとすると、宋之問という人物を單純に上昇志向のみの人物と見なすことに、評者はややためらいを感じた。彼に對する惡評には、自分たちの世界に入り込もうとする異分子を排

除したい貴族階層の意識が反映されている可能性も考えられるのではないか。そして何より、彼が駱賓王や陳子昂と親交があり、「祭杜學士番言文」のなかで四傑の不遇に言及して、新興知識人の價值觀にたち、その無念さを代辯していることなどを考えると、決して權力にすりよるだけの人間ではなかったように思われるのであるが、如何であらうか。^①

このような小さな疑問が生じることはあつても、廣く資料を涉獵し、ひとつひとつ積み上げてゆくような堅實な論證がなされている本書は、極めて説得力に富んでいる。初唐文學に對する研究は、今後、本書を出發點になされることであろう。著者の研究を消化したうえで、更に精密な研究が著者を含めて多くの研究者によってなされることは間違いない。評者も、本書を読んで啓發され、初唐文學に關する多くの想像がわき起こった。そのうちの幾つかを、最後に述べたい。

著者は、七言歌行を新興知識人の文藝として高く評價しておられる。貴族が宮廷サロンを文學の場とし、そこで律

詩を完成させて行つたのに對し、著者は歌行こそは、邊境を文學の場とした新興知識人の文學とされる。また、陳子昂が、次々と上書を提出したことに注目し、彼の政治に對する強い熱意を解明された。そのなかで著者は、陳子昂をはじめ新興知識人たちの多くが濃淡は差はあれ「兼濟と獨善」の思いを持つていたことを指摘しておられる。この二點に象徴されるように、初唐時期に勃興してきた知識人の文學的感性や行動には、強い共通性が感じられる。舊來の貴族階級とは異なる文學や理念を、新興知識人たちは、どのようにして形成したのだろうか。彼らを彼らたらしめた精神とその表現は、どこからどのようにして生まれてきたのであろうか。

歌行について、著者はその源のひとつとして、賦というジャンルとの關連を考へておられる。特に表現については、梁陳の賦からの影響を指摘しておられるが、文體としての「賦」を彼らはなぜ發見しえたのだろうか。例えば、その物語性や長大さということに注目すると、彼らは樂府とともに初期の賦など漢代の文學に親んでいた可能性は考えら

れないだろうか。そして、樂府はひとまずおき、彼らが當時既にアルカイックなジャンルとも思われていた賦を再發見する過程で、『文選』が一定の役割を果たしたのではないだろうか。岡村繁博士『『文選』の研究』（岩波書店 一九九九年）によれば、北朝末期、隋代には『文選』が教養書になっていたとされる。そして盧照隣が若年のころ、

『文選音義』の撰者曹憲について學んだことも、既に指摘がある。^②また、地方にあつて中央の流行を追いきれない彼らにとつて、學問と言へば正統的古典的なものにならざるを得なかったのではないだろうか。要するに彼らの文學や理念には古典の影があるのではないかと、評者は推測するのである。彼らと、彼らの文學や理念に共感した新興知識人には、漢代の文學や學術を中心とした古典的經典や作品の味讀によつて形成された、共通する「教養」のようなものの存在を想定してよいのではないだろうか。新興知識人のこのような基盤としての教養の實態を明確にできれば、初唐の文學の作者と受容者の問題がより一段と明らかにされることになる。

初唐文學の特色を示す文學者たちは、時の主流であつた文學觀や價值觀と食い違つた爲に不遇であり、その文學も重視されなかつた。しかし逆にそのような文學であるからこそ、どのような人々によつて、そして如何なる理由で愛されたのかという文學の受容者の問題は、他の時期にもまして重要な問題となるのではないだろうか。

本書は、複雑な様相を示す初唐文學の全貌を明らかにした。それだけではなく、ここに評にもならぬ想像を書き連ねたさせた如く、初唐の文學について讀者の興味をかき立てずにはおかない、刺激に富んだ一書なのである。

註

① 植木久行氏も本書の書評の中で、宋之間像の再検討の必要性を提議しておられる。（『東方』三〇一號 二〇〇六年三月）

② 盧照隣と王勃の賦作品にともに「馴鴛賦」がある。盧照隣の作は短く、王勃の作は長い。しかし、どちらも平上去入の順で押韻しており、詩ばかりでなく賦においても、彼ら相互の影響關係の存在をうかがわせる。